

20. Ga-67 びまん性肺集積の検討

吉川 和明 杉村 和朗 加藤 博和
 田中 寛 古川 雅彦 児玉 光史
 杉原 正樹 内田 伸恵 岩崎 純夫
 藤田 安彦 石田 淳 笠井 俊文
 石田 哲哉 (島根医大・放)

胆癌患者治療中に発生する薬剤性および放射線肺炎は、早期には胸部X線写真上異常影を呈さないことが多い。悪性腫瘍治療中肺野びまん性集積を認めた6例について検討した。6例中3例は、X線写真に先立ってガリウムシンチで異常集積を認めており、びまん性肺疾患の診断においてガリウムシンチは高いセンシティビティを有していた。病理学的検索を行った4例では、いずれも間質の炎症所見のみで、悪性腫瘍の浸潤像は認めず、ガリウムは間質の炎症へ集積したものと考えられた。悪性腫瘍治療中に間質性肺炎を疑った場合、胸部写真に異常を認めない場合でも、びまん性肺疾患を早期に発見する上で、ガリウムシンチは積極的に行うべき検査法である。

21. ^{123}I -IMP の肺癌例における集積の検討

謝花 正信 勝部 吉雄 (鳥取大・放)

原発性肺癌9例、転移性肺癌2例の計11例に対して ^{123}I -IMP 3 mCi 投与し、 64×64 のマトリックスにて100分間データ収集した。その後正常肺野と腫瘍部分にROIを設定し時間放射能曲線より平均通過時間を算出した。腫瘍部分は 41.5 ± 4.3 、正常肺野は 31.5 ± 3.2 と有意差がみられた。また初期像と100分後の像の間で総カウント補正によるサブトラクション像では肺癌の81.8%に陽性を認めた。集積部分は腫瘍の周囲の肺実質および腫瘍の表面と考えられた。

22. 原発性肺癌における SCC (リアビーズ法) の臨床的検討

佐藤 友保 桐生 浩司 勝田 静知
 (広島大・放科)
 大道 和宏 藤井 康史 中西 敏夫
 (同・放部)

血清 SCC 抗原を健常者40例、良性肺疾患患者53例、肺癌患者74例について測定しその臨床的意義を検討した。今回使用した SCC RIA BEAD はビーズ固相法を用いており、従来の SCC RIA kit と比べ操作が簡便で、短い反応時間で、少ない検体量で測定可能であった。本法による健常者の血清 SCC 値の平均は、 0.68 ± 0.43 ng/ml で、上限値を $+2$ SD である 1.54 ng/ml に設定した。肺癌の組織型別の検討では、陽性率は扁平上皮癌 53.6%、腺癌 15.6%、小細胞癌 7.7% であり、病期別の検討では、扁平上皮癌の陽性率はI期 57.1%、II期 50%、III期 35.7%、IV期 100% と他の組織型の肺癌に比べ全ての病期で著明に高値を示した。

23. モノクローナル抗体を用いた Immunoradiometric Assay (IRMA) 法による血清 SCC 抗原の測定

美濃 直子 阿多まり子 渡部 弥生
 宇都宮富代 大北 尚美 木村 良子
 飯尾 篤 浜本 研 (愛媛大・放)

血清 SCC 抗原は、子宮頸部だけでなく肺や他の臓器の扁平上皮癌においても有用なマーカーとして測定されているものの、いずれの臓器の扁平上皮癌においても早期例での陽性率が低く、スクリーニング検査法としては限界が認められている。最近 SCC 抗原についてモノクローナル抗体が作成され、これを用いた IRMA 法が開発された。今回われわれはこの新しい IRMA 法と従来のポリクローナル抗体を用いた二抗体法とで各種扁平上皮癌患者血清中の SCC 抗原値を測定し、両法での結果を比較した。IRMA 法では二抗体法に比し最小検出感度が良くなっており低濃度領域での測定精度が大幅に改善され、二抗体法では偽陰性となっていたような早期例や頭頸部の扁平上皮癌症例も検出可能となり、これらでの陽性率は著増した。すなわち、スクリーニング検査法としては、IRMA 法の方が優れた方法であることが判明した。